

特35

784

天
理
教
祝
詞
集

全

014455-000-1

特35-784

天理教祝詞集

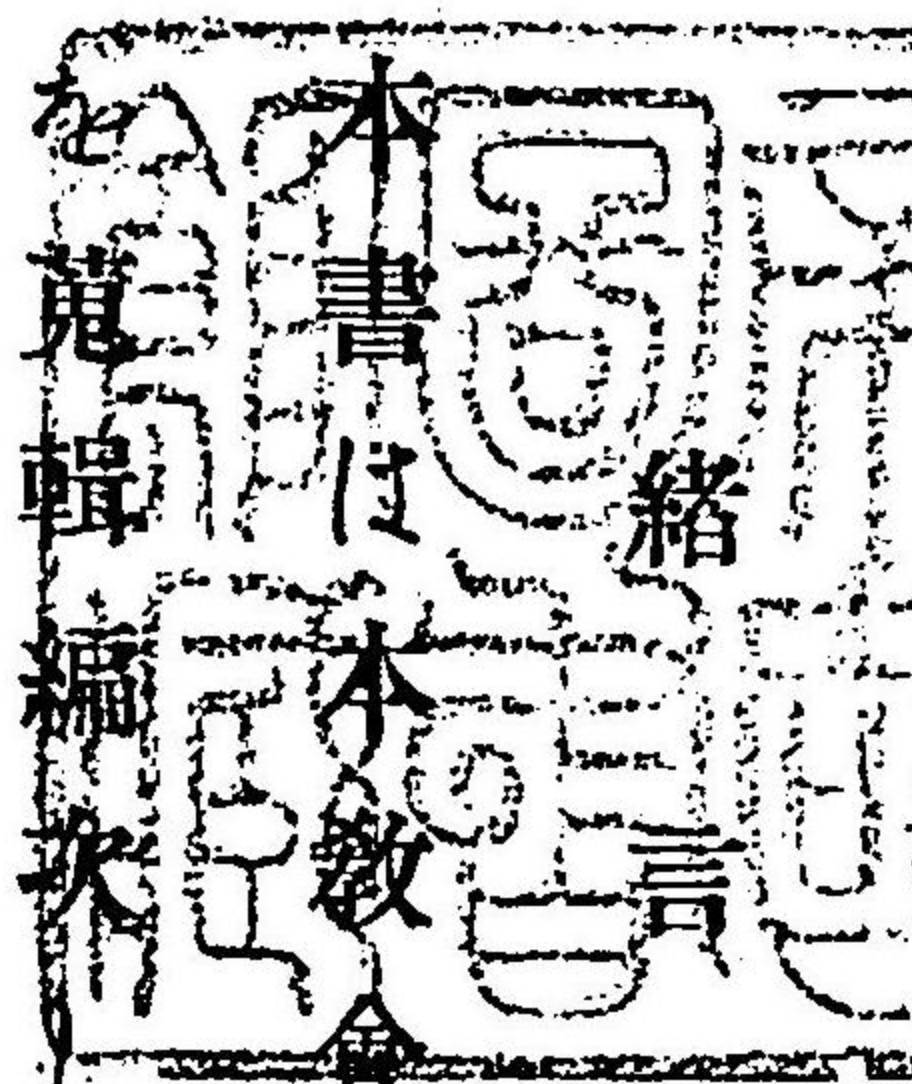
村松 吉太郎/編

M34

ABB-0833



天理教祝詞集



本書は本教會に於て從來用ゐ來れる諸の祝詞を蒐輯編次したるものにして本教の儀式及祝

詞の準據すべきものは別に本教禮典に在りされどそれは素と一班を示せるに過ぎざれば本書の編集はその欵を補ふの意に出づされば本教禮典を繙く者は必ず本書を参照すべく本書を



看む者は本教禮典を參照して彼此互にその缺
を補ふべし

明治三十四年九月

天理教祝詞集目次

主神教祖祭祀之部

- 一 春季大祭祝詞
- 一 秋季大祭祝詞
- 一 月並祭祝詞
- 一 教祖祭祝詞
- 一 教會開講式祝詞
- 一 主神假殿遷座祝詞
- 一 教祖神靈假殿遷座祝詞
- 一 主神新殿遷座祝詞

一教祖神靈新殿遷座祝詞

一主神鎮座祝詞

一教祖神靈鎮座祝詞

一信徒入社式祝詞

一全 誓詞

一每朝神拜祝詞

恒例祝祭之部

一一月一日祭祝詞

一祈年祭祝詞

一紀元節祝詞

一春季靈祭祝詞

一神武天皇祭祝詞

一六月大祓祝詞

一神嘗祭祝詞

一天長節祝詞

一新嘗祭祝詞

一除夜祭祝詞

臨時祭祀之部

- 一 祓祝詞
- 一 地鎮祭祝詞
- 一 柱立祭祝詞
- 一 上棟祭祝詞
- 一 大殿祭祝詞
- 一 祈雨祝詞
- 一 祈晴祝詞
- 一 除蝗祝詞
- 一 除疫祝詞
- 一 道路開鑿起工式祝詞

- 一 道路開通式祝詞
- 一 架橋起工式祝詞
- 一 架橋成功式祝詞
- 一 學校開場式祝詞
- 一 祈旅行安全祝詞
- 一 祈海上安全祝詞
- 一 祈漁獵祝詞
- 一 諸祈願報賽祝詞
- 一 成年式祝詞
- 一 婚姻式祝詞

- 一 誕生式祝詞
- 一 命名式祝詞
- 一 初詣祝詞

葬儀靈祭之部

- 一 遷靈詞
- 一 鎮靈詞
- 一 發葬詞
- 一 誄詞
- 一 埋葬詞

- 一 火葬詞
- 一 葬後靈祭詞
- 一 十日祭詞
- 一 五十日祭詞
- 一 百日祭詞
- 一 壹年祭詞
- 一 五年祭詞
- 一 改祭詞
- 一 遠祖祭詞
- 一 信徒合祀祭詞

一信徒合靈祭詞

目次終

天理教祝詞集

主神教祖祭祀之部

春季大祭祝詞

天地の廣く大く深く厚き天理のまにく世を幸へ人を恵み給ふ掛巻も畏く言巻も尊き天理大神と稱言竟

奉る十柱の大神等の大前に恐みくも白さく

毎歳の例のまにく本教々師又信徒等諸群鳥の打群

れ來て大前に庭雀如蹲居て今日しも梓弓春季の大祭

典奉仕らくは大神等い安見し我天皇高光る日の皇

孫の大御代を天壤無窮萬世一系に座奉り鎮奉りて大

八洲國內の限荒波の來寄する事なく暴風の吹起つ事
なく靜御代の安御代と守り幸へ給ひ本教々師信徒諸
は言卷くも更なり天下の公民のこころく每人毎家の
衣食住等を始めて何一不足事なく欽漏事なく成幸へ
寄惠み給ふ廣く厚く高く尊き恩資を常に辱奉り恐奉
るが故に大祭典奉仕りて神恩に報奉り神靈を奉慰ら
くこ進献る御酒御食又種々の物を御神徳の廣野に生
ひし物御神慮の大海に産りし物を平けく安けく所
聞食受け給ひて自今以往も浦安國の名も灼く守幸へ
給ひ又本教の信徒諸は教師の直く正しき心以て説示

し訓諭す事をら物をら聞くが任覺に得しめ見るが隨
悟り得しめて身を修め家を齊へ君に忠實に親に孝順
に眞心盡さしめむは更なり總べて人の人たる本分に
立身處世しめ給ひて國を富し民を福へ外國々この交
際も日に異に厚く月々に深く皇國の光は日月の隈な
きが如く輝き亘らしめ給へと鹿自物膝折伏せ鶴自物
頸根突抜きて恐みくも拜み奉らくと白す

秋季大祭祝詞

久方の天の極なく荒金の地の涯なく廣く大く深く厚

く世を主宰し人を恵幸へ給ふ掛巻くも畏き天理大神
 の大前を齋はり清はり慎み敬ひて白さく
 毎歳の例として春と秋とに大神等の大御祭奉仕りて
 稜威の御靈を奉仰り靈妙の御幸を奉祈らむと御祭美
 しく奉仕らくを今年も春の大御祭は奉仕終へて今は
 ちや露霜の秋とは成りにたり故本教々師信徒等諸群
 鳥の打群れ来て紅葉の赤き心を大前に捧げつ、今日
 しも大祭典奉仕らくは大神等伊安見し、我天皇高光
 る日の皇孫の大御代を天壤無窮に萬世一系に奉座り
 奉鎮りて大八洲國內の限荒波の來寄する事なく暴風

の吹起る事なく静御代の安御代と守り幸へ給ひ本教
 々師信徒諸は言巻も更なり天下の公民のこころ毎
 人毎家の衣食住等を始めて不足事なく欽漏事なく成
 幸へ寄恵み給ふ廣く厚く高く貴き恩賚を常に奉辱り
 奉恐るが故に大祭典奉仕りて神恩に奉報り神靈を奉
 慰らくと進献る御酒御食又種々の物を御神徳の廣野
 に生ひし物御神慮の大海に産りし物を平けく安け
 く所聞食受け給ひて自今以往も浦安國の名も灼く守
 幸へ給ひ又本教の信徒諸は教師の説示し訓諭す事を
 ら物を聞かば任覺に得しめ見るが隨悟り得しめて

身を修め家を齊へ君に忠實に親に孝順に總べて人の
人たる本分に違はず立身處世しめ給ひて國を富まし
民を福へ外國々々の交際も日に異に厚く月々に深く
皇の威國の光は日月の隈なきが如く輝き亘らしめ給
へと鹿自物膝折伏せ鶴自物頸根突抜きて恐みくも
拜み奉らくと白す

月並祭祝詞

掛卷くも畏き天理大神の大前に何某恐み恐みも白さ
く今日しも月次の御祭仕奉らむと爲て宇豆の御酒御

食種々の物を捧奉りて鶉成す伊波比毛斗保理拜み仕
奉る状を大神の御心に平けく安けく諾ひ給ひ献る幣
帛を安幣帛の足幣帛と聞食給ひて天皇の大御代を手
長の御代の茂御代と守幸へ給ひ湯津磐村の如く堅磐
に常磐に立榮にしめ給ひて安禮坐さむ皇子等皇族等
百官人等天下四方國の公民殊には本教の信徒諸が家
にも身にも災殃無く平けく安けく子孫の八十續伊加
之八桑枝の如く武久佐加に榮にしめ給ひ夜の守日の
守に守恵まひ幸へ給へと鹿自物膝折伏せ鶴自物頸根
突貫て恐み恐みも祈願奉らくと白す

教祖祭祝詞

高く貴き天理大神の大稜威を背に負ひ浮瀨に落る蒼
 生を救はむの大御恵を心に湛へてこれの現世に生出
 で給ひ世間の人民を天理のまに〜教導かむと御心
 を凝し御思を固めて立て給ひ起し給ひし教祖の命の
 神靈の御前に白さく命い廣く厚き御心慮のまに〜
 この世を恵み給ひ本教を布弘らしめ給ふが故にこれ
 の御教に入り本道に入る徒月々に多く年々に増り行
 くなる事を朝に夕に夜に日に奉悦り奉辱りて在れど

も今日はも殊に毎歳の例の靈社祭にしあれば御酒御
 食又種々の物を進献りて大前を齋奉らくを平けく安
 けく所聞食して自今以往も永遠に守幸へ給ひ彌廣に
 彌遠に教ふるが隨に教へ得しめ導くが隨に導き得し
 め給ひてこれの大教を稱益隆盛ならしめ給へと恐み
 くも請祈奉らくと白す

教會開講式祝詞

掛卷くも畏き天理大神の大前に何某信徒諸を率て慎
 敬ひ恐み恐みも白さく大神の奇しく妙なる大御功德

を慕ひ奉り請祈奉りて四方八方より嚴の御幸を蒙ら
むと參集來て朝夕に大神の御前を齋祭るにより此の
教の處を設け今日しも開講の式を執行ふになむ故新
なる神床を設備へ大神の御靈を齋鎮め坐奉りて御祭
の禮代と大野の原に生ふる物と甘菜辛菜大海の原に
住む物と鱈の廣物鱈の狹物御酒御食種々の物を横山
の如く置足はして御祭仕奉らくを平けく安けく聞食
して此の教の庭により集ふ人々をば禍日神の禍事な
く安く穩に御祭麗しく仕奉らしめ給ひ又他人々にも
大神の御靈幸へ給ひて次々に教の道に入立ちて尊き

御稜威を蒙らしめ給ひ天下四方の國を浦安の國の浦
安く細戈千足の國の宇萬志國と成さしめ給ひ大神の
御幸を遍からしめ給へと伊波比毛斗保理畏み畏みも
白す

主神假殿遷座祝詞

此の奥床を伊都の眞屋と齋麻波利清麻波理て今日の
御祭仕奉らむと畏み畏みも白す此度大神の千代の鎮
處と本殿造仕奉らむとして此の假殿になも遷奉る状
を平けく安けく聞食して齋官等が手の躓ひ足の麻賀

比をば神直日大直日に見直し聞直し給ひて大前に奉
る豊御酒豊御食海川山野種々の物を安幣帛の足幣帛
こ聞食給ひて大殿舎の造畢へむ間は此の處に鎮座し
て教師を始め信徒諸を守給ひ幸給ひ又大神の御靈に
よりて築立つる本殿をば大土の底津石根彌堅く常磐
に堅磐に搖ぎなく速に造畢へしめ給へこ鵜自物頸根
突貫き恐み恐みも白す

教祖神靈假殿遷座祝詞

言はまくも畏き我が教祖神と仰ぐ眞道彌廣言知女命

の御前に何某慎敬ひて白さく汝が命の嚴の御靈によ
りて天の下四方國到る處に御教の弘布りて大神の御
幸を蒙らむこ請祈奉る者の多なる中に此の教師信徒
諸の人々此度教祖命の殿宇造仕奉らむこして今日を
生日の足日と稱奉り遷座の式仕奉らくを平けく安け
く聞食して奉る宇豆の幣帛を宇麻良に聞食諾給ひ此
の處に大座まさむ間も教の事に御靈幸給ひて伊與々
益御教を盛ならしめ給へこ慎敬ひ恐み恐みも白す

主神新殿遷座祝詞

此の新床を排清めて齋鎮奉る掛巻くも畏き大教主神
こます天理大神の大前を敬慎みて白さく此の地を下
津石根の限り堀固め上津石根に築立て高天原に千木
高知りて天の御蔭日の御蔭と大宮所造仕奉り此度其
の業畢へて今日しも遷座の御祭仕奉らむと供奉る物
は青海原に住む物と鱈の廣物鱈の狭物大野原に生ふ
る物と甘菜辛菜に至るまで御酒は甕の上高知甕の腹
満並へ雜物を横山の如く積置きて献る宇豆の大幣帛
を安幣帛の足幣帛と平けく安けく聞食して此の大殿
舎を千代萬代の鎮處と御稜威彌著く御功德彌高く天

皇の御代を手長の御世の茂御世と成幸へ給ひ吾が教
に入立てる人々をば八十禍日神の禍事なく守幸へ給
ひて此の大教をば青雲の靄極み白雲の墜坐向伏限り
大倭豊秋津島根の内は更なり久茂非奈須遙き外國ま
でも弘布らしめ給へと恐み恐みも白す

教祖神靈新殿遷座祝詞

言巻くも畏き吾が教祖神の神靈の御前に白さく先つ
頃より新殿造仕奉りつゝありけるに工匠等日に異に
勤勞きければ夙く其の事成終へて最も壯嚴に造奉り

竟ぬ故今日しも遷座の御祭執行はむと海山河野の物
雑々を供奉りて嚴の御靈を齋祭り御前に白す事の由
を平けく安けく聞食して大教を日に異に盛ならしめ
教師信徒諸をば夜の守日の守に守幸へ給ひて彌遠に
彌長に御祭美しく仕奉らしめ給へと鹿自物膝折伏せ
鵝自物頸根突抜きて恐み恐みも白す

主神鎮座祝詞

天の壁立つ極み國の退立つ限り見霽し坐す天地四方
の國といふ國島といふ島を始めて大稜威の到蒙らぬ

ここなき掛卷くも綾に恐き天理大神の大前に何某慎
敬ひ恐み恐みも白す大神伊久方の天地の初より此の
世界に大坐まして國土人獸草木に至るまで有こある
種々の物を成出給ひ寒暑の時候違へず雨風の時節過
たず生きとし生ける物の命を保長らへしめ父子兄弟
の道をさへ定め給ひて萬の物みな其の處を得しめ殊
に吾が豊葦原瑞穂の國は外國に優りて安國の宇麻志
國と御靈幸へ給ひて此の御國を万千秋の長五百秋に
浦安の國と平けく知食せと事依し給ひき斯れば大八
洲皇國の大御國風は他國には立勝りて萬の御政事寛

に言舉せぬ國にし有れど三粟の中津御代より外國の
道渡來て人事繁く成以行き御政事種々に分れて人の
心も亂るゝ状になりたり然はあれども尊き大神の御
稜威こそは争て隠れめ吾が教祖斯る澆季の世に生出
給ひ大神の御稜威を説教へ人道の踐みて行くべき程
々を訓誨し給ひければ世の人々も始めて正しき神の
道を悟り大御國の大御國風をも辨知り大教は日に異
に弘り月毎に盛に成行きて今は教師信徒萬の數もて
小指折るべき程になりぬ此の處にても此度教師信徒
數多くなりたれば瑞の御殿舎造り教會所建てゝ大

教の主神と稱奉り齋奉る天理大神の分靈を齋奉りて
此の新殿に鎮祭り教師信徒諸仕奉らむと今日を生日
の足日と擇定めて鎮座の御祭執行ふ状を平けく安け
く聞食して奉る宇豆の幣帛を安幣帛の足幣帛と諾ひ
給ひ天皇の朝廷を始め親王等諸王等百官の人々天下
の百姓に至るまで夜の守り日の守りに守幸へ給ひ此
の教會所に關係ふ人々をば禍事に相まじこる事なく
子孫の八十續五十八桑枝の如く立榮はしめ此の御殿
舎と共に堅磐に常磐に幸く眞幸く有らしめ給へと恐
み恐みも白す

教祖神靈鎮座祝詞

掛卷も畏こき吾が教祖眞道彌廣言知女命の御前に畏
み畏みも白さく八十日は有れども今日を生日の足
日と伊波比定めて瑞の御殿舎に分神靈齋鎮座の御祭
仕奉らむとす言はまきは畏かれども命い梓弓末の世
に生出給ひて空蟬の世の人心漸々に降行くを慨かひ
諸人が浮瀨に落ちて歎苦むここをし憐れ見そなはし
給ひ争て世の諸人を救はむと焼鎌の敏心起し天理大
神の御功德を説教へ人々の迷の心を朝の霧を昇る旭

の搔消す事の如く拂清めて尊き神の御稜威を拜み奉
り慕ひ奉らしめ天下の人心を安く穩に治め給ひ鎮め
給はむと晝は終日夜は終夜説諭し教導き給ひければ
烏玉の暗に燈を得たらむ如く渡に舟を得たらむ如く
天下四方より御功德を慕ひ奉り請祈奉る人々出來て
此處彼處に教會所なむ設けられぬ此の處にても此度
新に神殿を設けて教祖の御心を心とし大教を敷弘め
むとして今日しも神靈鎮座の御祭仕奉らくを可憐と
思召して奉る宇豆の御酒御食を始め海川山野の種々
の物を禮代の御天久良と聞食宇豆那比給ひ大教を日

に月に盛ならしめ教師信徒に嚴の御靈幸へ給ひて平
けく安けく大教に勤勞かしめ給へと拜奉らくと白す

信徒入社式祝詞

掛卷くも畏き天理大神の大前に教師職姓名何某慎敬
ひ恐み恐みも白す此度何國何郡何村大字何なる某大
神の御功德を慕ひ奉り教祖の大教の旨を畏奉りて吾
が尊き教を受け斯の道に入立たむと請祈奉る心の切
なるによりて定れる儀式の隨今日しも入社式行はむ
と禮代の幣帛捧奉る狀を平けく安けく聞食して今日

より後は身も剛健に心も安穩に在らしめ給ひて大神
の御稜威を畏み教祖の大教を守らしめ廣き厚き大御
幸を蒙らしめ給へと恐み恐みも白す

信徒入社誓詞

掛卷くも畏き天理大神の大前に恐み恐みも白す已劣
き身にはあれど大神の御功德を慕奉り畏奉りて某教
師の教導以て教徒の群に入立ち今日その儀式仕奉終
ぬれば今より後は大教の隨行勵みて世の事家の業に
勤勞き教旨に露違ふまじく故今大前に誓詞白し奉ら

くを憐と聞食して諸の過犯しけむ事は見直し聞直し
給ひ世の忠人世の幸人たらしめ給へと恐み恐みも白
す

毎朝神拜祝詞

掛巻くも恐き吾が大教主神と持齋く天理大神の大前
を拜奉りて白さく大神の高き尊き御恩頼によりて安
く穩に家の業を勤勵み成務むる萬の事業を日に異に
進めて諸の災無く諸の禍事無く家内睦合ひて已が向
々ならしめず子孫の彌遠永に榮ゆる家とあらしめ給

へと恐み恐みも白す

恒例祝祭之部

一月一日祭祝詞

掛巻くも畏き天理大神の大前に何某慎敬ひ恐み恐み
も白す今日新玉の年の初日の朝日の豊榮昇に年の始
の御祭仕奉らむと爲て奥山の大峽小峽に茂立る五百
枝真榊に常磐の松を真根掘の根掘に掘來て御門に植
樹宇豆の注連繩曳延へて日の御旗打靡し齋回り清回
り伊都幣の緒結び天の美賀祕と冠り拜み進退ひ捧奉

る幣帛は豊御酒大御食を始めて海川山野の種々の物
及今日の例に千代の若水鏡の餅飯に至る迄横山成す
置足はして捧奉らくを大御心も宇良々に安幣帛の足
幣帛に平けく安けく聞食給ひて東洋に波荒るゝ事な
く日本島根に風騒ぐ事なく明津御神に大八洲國知食
す天皇の大御代を手永の御世の茂御世に成幸へ奉り
天津日嗣は天地の共彌遠に彌永に榮はしめ親王等諸
王等百官人等殊には信徒にあらる男女及天下の公民諸
に至る迄夜の守日の守に守幸給へと恐み恐みも白す

元始祭祝詞

内日刺す都も天放る鄙も大神の御靈幸によりて平く
穩に新しき年を迎へて今日はしも三日とはなりぬ故
元始祭の祭儀行はむと本教の教師信徒諸此の神殿に
參來集ひ何某掛巻くも畏き天理大神の大前に慎敬ひ
て白さく風の音の遠き古千早振る神代の昔我が十柱
の大神此の世界を造り蒼生萬物を生出給ひて此の大
倭豊秋津洲瑞穂國は萬國に優れたる宇麻志國と皇孫
命千代萬代に知食給ひ安國の足國と空蟬の遠き世ま
でも變ることなく年毎の御祭美しく仕奉るは全く大

神の御恩頼になもありける然れば今年も例の隨今日
の御祭仕奉らむと五百枝眞榊に白幣青幣を取垂て宇
豆の幣帛を横山の如く置足し奉り御祭仕奉らくを平
けく安けく聞食給ひて皇孫命の御代を大殿に曳く注
連繩の彌遠永に常磐に堅磐に守幸へ給ひ親王等諸王
等臣等百官の人々に至るまで平けく安けく守給ひ吾
教徒は更なり天下の公民諸罪咎有らしめず夜の守日
の守に守幸へ給へと鶉なす伊這ひもとほり慎敬ひ恐
み恐みも白す

孝明天皇祭祝詞

掛巻くも恐き後月輪東山陵を遙に拜み奉り何某慎敬
ひて白さく天皇はしも仁孝天皇の第四御子と生出
給ひ天保と云ふ年の十一月庚子彌生十四日日齡十歳
にて皇太子に立たせ給ひ弘化の四年丁未九月廿三日
天つ日嗣の大御位に即かせ高御座に大坐まして天下
の大政を総攬れさせ給ひけるがその頃は畏くも今の
大御代とは事變り朝廷の大政事は東の方に移りて將
軍の威のみ盛にて皇朝廷の御稜威偏からず故天皇は
痛く憤慨給ひて天下の志士を召上せて種々謀り給ひ

又その頃外國より軍艦來りなどして人心安からざれば天皇は又これをしも憂ひ給ひて千早振る神々に祈給へるなど天下の事に大御心を惱ませ給へるこのの畏さは今更申奉らむ術だにあらざりきかくて天下の政事を知食させ給へること二十年餘にして惜しくも此の世を棄て雲隠れ給ひぬ今斯く已等蒼生の盛なる大御代に遇ひつゝ四方の海波靜なる時に生長ふることはしも天皇の御國を憂へさせ給ひ種々に事謀り給ひし餘澤にこそあれ故今日此の御祭の日に遇奉りて往にし事ども畏くも愚奉り慕奉りて御祭仕奉らむこ

此の所に神籬立て宇豆の幣帛供奉りて白す事の由を平けく安けく聞食して我が大倭豊秋津洲の國內は更なり交せる國々も平く穩に蒼生の業盛に國富み兵強く彌益盛なる國と有らしめ給へこ本教の教師信徒諸に代りて恐み恐みも白す

新年祭祝詞

大教主神こます掛卷くも畏き天理大神の大前に慎み敬ひ畏み畏みも白す朝廷の式典を畏奉りて毎年の例の隨に今日の生日の足日の朝日の豊榮登に祈年の御

祭仕奉らむと爲て御酒御食又大野原に生ふる物と甘
菜辛菜青海原に住む物と鱸の廣物鱸の狹物奥津藻葉
邊津藻葉を取加へ御服は明妙照妙和妙荒妙又種々の
物供奉り五百枝眞賢木に清苧白木綿取垂て太玉串と
持捧齋知り嚴知り拜仕奉る状を相宇豆那比給ひ献る
幣帛を安幣帛の足幣帛と平けく安けく聞食給ひて皇
御孫命の遠御膳の長御膳と赤丹の穂に聞食す五穀物
を始めて天下の公民の手脰に水沫畫垂向股に泥畫寄
せて取作らむ穀物は惡風荒水に遇はしめ給はず八束
穂の伊加志穂に成幸給へと鹿自物膝折伏せ鶴自物頸

根突貫て恐み恐みも祈願奉らくと白す

紀元節祝詞

大教主神と奉齋る天理大神の宇豆の大前に何某恐み
恐みも白さく天皇の大神祖と坐す神日本磐余彦天皇
の始めて畝火櫃原の大宮に天津日嗣知食給ひし紀元
を言壽奉給へる天朝式典に倣奉り御祭仕奉らむと爲
て持齋まはり持清まはり御酒御食を始めて海川山野
種々の物を百取の机に置足はして捧奉り宇豆の玉串
を持捧りて拜仕奉る状を相諾給ひ献る幣帛を安幣帛

の足幣帛と平けく安けく聞食給ひて神隨も明津御神
と大八洲國知食す天皇の大御代を手永の大御代と湯
津磐村の如く堅磐に常磐に天津日嗣の御隆は天壤の
與無窮に皇が大御稜威は彌廣に彌高に敷坐る島の崎
々搔見る磯の崎々落ちず貴きも賤きも同心に老も若
も同思に業を勵み務を成しつゝ異き道に惑ふことな
く悪き行に交ることなく狭國は廣く峻國は平けく遠
國は八十綱打掛けて引寄する事の如く依奉りて國威
國光愈益輝渡らしめ給へと鹿自物膝折伏せ鶴自物頸
根突貫て恐み恐みも白す

春季靈祭祝詞 秋季靈祭祝詞倣之

掛卷くも畏き我が教祖と坐ます眞道彌廣言知女命の
御前に教師信徒等を率ぬ何某慎み敬ひ恐み恐みも白
さく千早振る神の大御代高天原に事始給ひし式典の
隨に毎年に春の御祭秋の御祭と花有る時は花を以て
祭り又旗立笛吹き鼓打ち歌ひ舞ひつゝ歴代の天皇の
御靈の御前を齋奉給へる天朝の嚴く尊き御祭の式に
倣奉り年毎に仕奉る例の任に今日しも御靈祭仕奉ら
むと爲て宇豆の御酒御食に海川山野の種々の物を取

添へて折竹の登袁々登袁々に持來て百取の机も處狹
迄置足はして献り五百枝眞榊に白和幣取垂太玉串こ
持捧齋知り嚴知り恐み拜み仕奉る狀を相諾給ひ献る
幣帛を安幣帛の足幣帛と平けく安けく聞食給ひて高
く貴き此の御教は樛木の彌次々に絶ゆる事無く到ら
ぬ隈無くあらしめ給へと恐み恐みも白す

神武天皇祭祀詞

此の神牀に奉坐奉齋る掛卷くも畏き天理大神の大前
に何某恐み恐みも白さく言卷くも忌々しく尊き神日

本磐余彦天皇はしも庚申歲春正月庚辰朔日に生坐給
ひ甲寅歲大御旗立御軍を率ぬ日向國の高千穂の大宮
を出立し給ひ名草戸畔丹敷戸畔兄猾兄磯長髓彦及諸
の魁帥等を討罫め伐平け給ひ辛酉歲春正月庚辰朔日
大和國の榎原の大宮に天津日嗣知食給ひ天下四方國
の公民を撫給ひ愛給ひ丙子歲春三月甲午朔甲辰の日
崩給ひき斯く天皇の健く尊く大御心以て天業知食給
ひ萬機治給ひし狀の畏く尊き極なるを常に重奉り恭
奉りて天に仰き地に伏しつゝ廣き厚き恩頼をら慕奉
りては有れども今日はし殊に一年に一度と定給ひて

厳しき御祭仕奉るべき日にし有れば禮代の幣帛と豊御酒大御食海川山野の種々の物をら置高成して献り宇豆の玉串を持捧げて拜奉り入紐の全心に仕奉る状を相諾給ひて安幣帛の足幣帛と聞食受給ひて皇が御稜威を彌高に彌廣に國の富國の力は湯津磐村の如く成幸給ひ天下平穩に公民安逸に令在給へと恐み恐みも祈願奉らくと白す

六月大祓祝詞 十二月大祓祝詞倣之

掛巻くも畏き天理大神の大前に何某恐み恐みも白

く本教の教師教徒とある男女諸が過犯しけむ罪事を天津罪國津罪と宣別けて今年六月(十二月)晦日の夕日の降の大祓に祓清給はむことを相諾給へと献る御酒御食種々の幣帛を安幣帛の足幣帛と聞食給ひて今より後不意も觸れけむ諸の穢事不心も犯しけむ諸の罪事をば見直し聞直しまして永く久しく守幸給へと恐み恐みも白す

神嘗祭祝詞

掛巻くも畏き天理大神と稱辭竟奉る十柱の大神の大

前まへに何なに某あつ慎しんみ敬かたひ恐おそみ恐おそみも白まさく今年ことしも大神おほの御み
靈たまによりて梓あざ弓ゆみ春はるの初はつより雨あめ風かぜ時ときを違たがへず五いつ穀こく善よく
實みのりて稻いね穂ほは八や束つか穂ほの伊い加か志し穂ほに成な幸さい給たまひぬれば朝あ
廷ていの式しき典てんを畏かしこまりて大神おほの大おほ前まへに神かみ嘗なめの大おほ幣はて帛くさと御み
酒さけ御み贄ね懸かけ税ぜい千ち税ぜい餘あま五ご百ひゃく税ぜいを捧たか進まり今日けふ十月じゅう十日じゅう餘あま七しち
日かの朝あさ日ひの豊とよ榮さか昇のぼり御み祭まつり仕つか奉まつらむと爲して献たまる幣はて帛くさは
神かみ水みづ片かた鹽しほ鏡かがみ餅もち飯いひ荒あ稻いね和にじ稻いね御み酒さけは甕かみの上うへ高たか知しり甕かみの腹はら
滿み並なべて山やま野のの物ものは甘あま菜な辛から菜な青あお海うみ原はらの物ものは波は多たの廣ひろ
物もの波は多たの狭せま物もの奥おく津つ藻も葉は邊へ津つ藻も葉はに至いたる迄ま雑ざつ物ぶつを横よこ山やま
の如ごとく置お高たか成なて鶉うら成なす齋いひ伏ふしつゝ袁えん呂りょ賀か美み仕つか奉まつる状さま

を聞き食くし相あ宇う豆まめ那な比ひ給たまひて天あま皇みことの大おほ御み世よを堅か磐いに常とこ
磐いに伊い賀か志し御み代よに幸さい給たまひ親か王を等たち諸あ王を等たち臣を等たち百ひゃく官くわん人ひと等たち
及また天あめ下したの公おほ民たみの殊ことには本ほん教きょうの信しん徒た男をとこ女をんなを守まも幸さいへ給たまひ玉たま
牆かきの内うち津つ御み國くには言い卷まくも更さらなり海うみ外のの遠とほ國くに人ひとに至いたる
まて豊ゆたけき皇あま御み國くにの御み恩めぐみを仰あやき慕したはしめ貴たかき大神おほの
稜かど威いを尊たかび蒙あまらしめ給たまへと恐おそみ恐おそみも稱た辭こと竟さへ奉まつらく
と白ます

天長節祝詞

掛か卷まくも畏おそき天あま理り大おほ神かみの大おほ前まへに何なに某あつ恐おそみ恐おそみも白まさ

く八十日日はあれども今日の生日の足日はしも明津御神と大八洲國知食す今上天皇陛下の御生坐給ひし吉日の重日と天朝を始めて天下國と云ふ國の悉縣と云ふ縣の限神祝々奉り豊壽々奉る美乃利の隨に宇豆の大前に壽詞稱へ御祭仕奉らむと爲て御酒御食種々の物を今日の禮代と捧奉り手拍拜み仕奉る狀を宇豆那比給ひ進る幣帛を平けく安けく聞食給ひて天皇の此の大御代を知食す事はしも大内山の松の緑の色濃きが如と御溝の水の流盡せぬが如と彌遠に彌長に大御稜威はしも天の壁立極國の退立限愈廣らに大坐ま

すべく令在給ひて天津日嗣を天壤と無窮に守幸給へ
と恐み恐みも白す

新嘗祭祝詞

掛卷くも畏き天理大神の大前に何某恐み恐みも白さ
く此の豊秋津洲瑞穂國に生出つる五穀を始め天下の
百姓の作りと作る物は大神の御靈によりて荒き風惡
しき雨の災なく瑞穂八束に實り終へぬ故其の稻穂を
賀牟奈我良聞食給へと今日の生日の足日に新嘗の御
祭仕奉らむと手肱に水沫搔垂向股に泥搔寄せて取作

れる奥津御年の初穂なる八束穂の伊賀志穂の荒稻和
稻を千穎八百穎に奉り御酒は穂の上高知り穂の腹満
雙て汁にも穎にも大野原に生る物は甘菜辛菜青海原
に住む物は鱈の廣物鱈の狭物奥津藻葉邊津藻葉に至
る迄御服は明妙照妙和妙荒妙に備奉りて齋知り嚴知
り持齋廻り持清廻り進る幣帛を安幣帛の足幣帛と平
けく安けく聞食給ひて天皇の遠御膳の長御膳と赤丹
の穂に聞食さむ五穀物を始めて天下の百姓の取作ら
む物は草の片葉に至迄成幸給ひて皇が大御代を茂御
代の足御代に幸給ひ我が教の教師信徒等をば夜の守

日の守に守幸給へこ恐み恐みも白す

除夜祭祝詞

掛巻くも畏き天理大神の大前に何某恐み恐みも白さ
く大神の廣き厚き大御心以て夜の守日の守に守惠給
ひしが故に喪無く事無く宇良安く宇良樂しく大船の
躊躇ふ間なく許々太久の日時送迎へて今日は今も今年
の最終と成以て來ぬれば御恩の千重の一重をだに報
い奉らむと宇豆の御酒御食種々の物を捧奉りて拜み
仕奉る状を相宇豆那比給ひ進る幣帛を平けく安けく

聞食給ひて今も往先も伊與々麻須麻須守給へ幸給へ
と恐み恐みも白す

祓祝詞

掛巻も畏こき祓戸大神等を遙に拜奉りて恐み恐みも
白さく今日の御祭事に仕奉れる教師信徒及參來集へ
る諸人等が不意犯しけむ罪咎又見觸れ聞觸れたる穢
等の有らむをば祓給ひ清給ひて御祭宇留波志久仕奉
らしめ給へと恐み恐みも白す

地鎮祭祝詞

掛巻も綾に畏き天理大神の大前に恐み恐みも白さく
今回此處に大神の嚴の御靈を堅磐に常磐に齋鎮奉ら
む御殿を造仕奉らむと高きを平け低きを埋め堅磐の
大石を齋柱が根に齋堀居ゑむと生日の足日の今日の
朝日の豊榮昇に御祭仕奉りて宇豆の御酒御食種々の
物を禮代の幣帛と捧奉りて伊波比拜奉らくを相宇豆
那比給ひて雨降り風吹き地震動かむも此地の由流伎
損ふ事無く千代萬代經とも變る事無く堅磐に常磐に
守幸給へと恐み恐みも白す

柱立祭詞

此の齋庭を祓清めて御祭仕奉らむと天理大神の大前に何某恐み恐みも白さく此度大神の殿宇造仕奉らむと日に異に恩頼を蒙りつゝ木匠等勤勞きて柱桁梁等漏るゝ事無く落つる事無く成畢へつれば今日を生日の足日と齋定めて齋柱立式奉仕らむ禮代の御饗と御酒御食海川山野の種々の物を置足はして進り伊波比拜奉らくを相宇豆那比給ひ安幣帛の足幣帛と聞食うけ給ひて今より後彌遠長に守幸給ひ嚴の殿舎壯嚴に

作り畢へしめ給へと恐み恐みも白す

上棟祭祝詞

奥山の大峽小峽に茂立てる五百枝眞賢木を佐彌古自の根掘に掘取り青和幣白和幣を取垂又種々の神寶を備奉りて神籬樹て招奉り令坐奉る掛巻も畏き天理大神の大前に何某恐み恐みも白さく大神を永遠に奉鎮り奉齋らむと此の御殿を造り仕奉らむ業はしも奥津藻の最輕からぬ業なれども皇神等の廣き厚き恩頼に依りて障滯る事無く緩怠る事無く過たず害はず如此

麗しく作竟へぬれば今日を生日の足日の吉日と卜相
定めて上棟式仕奉り齋麻波理清麻波利宇豆の大御酒
大御食に海川山野の種々の味物を今日の御饗と置高
成して進り伊都の玉串に清苧白木綿取垂て、捧奉り
手拍拜奉仕らくを相宇豆那比給ひ築建てたる真柱架
渡したる桁梁及戸牖の錯に至る迄動鳴る事無く打堅
めたる釘の緩び取葺ける瓦の破損ふ事なく底津石根
の極青雲の霽く限波布虫飛布鳥の禍無く萬千秋の長
五百秋に平けく安けく守幸給へと恐み恐みも白す

大殿祭祝詞

掛巻くも畏き天理大神の大前に恐み恐みも申さく大
神の瑞の御殿舎造仕奉らむと教師諸々工匠等を率ぬ
て霄も曉も忘るゝことなく晝も夜も怠ることなく勤
勞きつゝ造畢へ奉れる此の御殿舎はしも奥山の大峽
小峽に立てる木を齋部の齋斧以て伐採り千代萬代に
動なき齋柱と齋鉏以て築立て大神の天の御翳日の御
翳と麗しく厳しく造建て備奉りけらくは天津祝言以
て言壽鎮白さく大神の鎮座さむ此の大宮地は底津磐
根の極み下津綱根の限り波布虫の禍無く飛鳥の禍な

く柱桁梁戸牖の錯ひ動鳴ることなく引結べる葛目の
緩ひ取葺ける草の噪ぎなく大神の嚴の大神幸の隨に
常磐堅磐に守給ひ大神の御稜威炳然く御慈恩顯然に
天下四方に輝かしめ給へ今日を生日の足日と各大
前に參來集ひて御祭仕奉り種々の幣帛捧奉りて伊波
比拜奉らくを平けく安けく聞食して過犯しけむ種々
の罪穢有らむをは神直日大直日に見直し聞直し給へ
と畏み畏みも白す

祈雨祝詞

掛卷くも畏き天理大神の大前に何某慎敬ひ恐み恐み
も白さく此頃日遍く雨降らず旱續きて流行く河水絶
に堀溜めし池水盡き植ゑたりし田畠の物ども萎み損
はれ枯れなむと爲るが故に公民諸歎き悲み爲む便の
手着を知らに臨時の御祭仕奉り奇しく異しき恩頼を
乞祈奉らむと本教の教師等伊都の忌屋に忌籠り大前
に齋知り嚴知り捧奉る幣帛は宇豆の御酒御饌海川山
野の種々の物を入取の机に置足はし信徒等諸大前に
參集侍り晝は日のことく夜は夜のことく伊這ひ
毛斗保里群居て仰き拜み伏し轉びつゝ祈願奉らくを

相宇豆那比給ひ御靈幸へ給ひて彼方此方の山々より
雲立騰り大海の奥邊に競棚引き忽に天津水の良き水
の甘き水をら雨と降らしめ大川小川多藝智流れて田
畠潤ひ渡り取作れる奥津御年を始めて蒔生ふし植ゑ
渡せる物のこころ立返り青み行きて彌榮ゑに榮ゑ
しめ彌繁に繁らしめ成幸へ給へと鹿自物膝折伏せ鶴
自物頸根突貫きて恐み恐みも白す

祈晴祭詞

掛卷くも畏き天理大神の大前に恐み恐みも白さく此

頃雨雲覆ひて晝夜分かす霖雨降と降續き彼此の山々
より落瀧つ大河小川の水溢れ百姓の手脛に水沫晝垂
向股に泥晝寄せて取作れる五穀物成らず傷はれて諸
憂歎かひ爲むすべなき状を高く尊く廣く厚き大御心
に米具し悲しと思坐して科戸の風を伊吹起し雨雲を
伊吹拂ひて天津日影を伊照徹らせ百姓の作りと作る
五穀物を始めて山縣に播ける青菘の類に至迄成幸給
へと宇豆の御酒御食種々の幣帛を今日の禮代と齋回
り清回り八取の机上に置高なして進り鹿自物膝折伏
せ鶴自物頸根突貫きて恐み恐みも祈願奉らくと白す

除蝗祭詞

掛卷くも畏き天理大神の大前に恐み恐みも白さく明
 津御神の大八洲國知食す今上天皇陛下の撫給ひ愛給
 へる百姓が手脛に水沫晝垂向股に泥晝寄て取作れる
 穀物を昆虫羽虫の沸出飛來て食枯し食盡さむと爲な
 るは悪事の多きが中にも殊に甚じき災事と今日しも
 諸人等右寄り左寄り寄來集ひて御祭仕奉り乞禱白さ
 むと宇豆の御酒御食を始めて海川山野の種々の物を
 置足はして進り五百枝眞賢木に須賀苧白木綿取垂て

太玉串と持捧げ齋知り嚴知り拜み仕奉る狀を相宇豆
 那比給ひ献れる幣帛を安幣帛の足幣帛と平けく安け
 く聞食給ひて天皇か遠御膳の長御膳と赤丹の穂に聞
 食さむ五穀物を始めて百姓の作と作る物どもは草の
 片葉に至迄昆虫羽虫の害を拂ひ除き防ぎ去らしめ成
 幸へ依し賜は、初穂をば千穎八百穎に献り種々の物
 をも横山の如く奉仕らむと誓ひ奉りて恐み恐みも祈
 願白す

除疫祭詞

掛巻くも畏き天理大神の大前を拜みまつりて恐み恐
 みも白さく此頃疫病多に起りて諸人が中に或は病臥
 し阿都加比惱み或は露の命消を争ふばかりに歎き悲
 み或は全く消亡たるも多かる故に爲む便の手着を不
 知に今は大御幸を乞奉らむ外なしとて今日しも非時
 の御祭仕奉り御酒御食種々の物を置足はし進りて伏
 拜み祈願奉らくは大神の奇しく異しき御稜威以て神
 議々給ひ一日片時も速けく朝の御霧夕の御霧を朝風
 夕風の吹拂ふ事の如く天皇の撫給ひ愛給へる公民諸
 に凶事爲す物どもをば吹拂ひ追退給ひて病しき事な

く煩しき事なく恵み幸へ給へと恐み恐みも白す

道路開拓起工祭詞

掛巻くも畏き天理大神の大前に何某恐み恐みも白さ
 く久形の天の益人月に日に異に彌益々に生生て人里
 の月毎に開け年毎に榮ゆる隨に四方八方に道は有れ
 ども其道足り成はぬも多かれば今度更に本教信徒等
 の議定て何々里より某々里に至迄馬に車に往と往通
 ふ正しく直き大道を作り開かむと今日の生日の足日
 に御祭仕奉りて事始爲ましと宇豆の御酒御食を始て

海川山野の種々の物を禮代の御天久良と置足はし由
志利伊都志利拜み仕奉らくを相宇豆那比給ひ平けく
安けく聞食て此業を勤み成む人々等諸に過無く障無
く逝く水の速けく成功しめ給へと鹿自物膝折伏せ鶴
自物頸根突貫て恐み恐みも祈願奉らくと白す

同 開通式祝詞

掛巻くも畏き天理大神の大前に姓名恐み恐みも白さ
く大神の廣き厚き恩頼に依て何々より某々に至迄幸
く眞幸く新治の道作開き畢へぬれば今日を生日の足

日の吉時と卜相定て大神の大前に御祭仕奉りて道路
開通式執行むと宇豆の御酒御食海川山野の種々の物
を置高成して禮代の幣帛と捧奉り手拍拜み奉らくを
安幣帛の足幣帛と聞食受け給ひて夜晝分かず往來ふ
諸人は夜の守日の守に守りたまひ又常磐に堅磐に雨
にも風にも崩るゝここなく破るゝここなく惠幸へ給
へと鹿自物膝折伏せ鶴自物頸根突貫て恐み恐みも白
す

架橋起工祭詞

掛巻くも畏き天理大神の大前に何某恐み恐みも白さ
く是の何々川はしも遠近の高山短山より許々太久の
谷水流打合ふ所なるが霖雨降濺がむ時は諸人得渡
るべくもあらず將船泛けて濟らむ手着も有らねば此
度信徒等諸思ひ起して打橋の高橋架けむと諸人に議
らひ官に願得て今日を生日の足日と撰定て事始めむ
と預れる人々右寄り左寄り寄集ひて御祭仕奉らむと
宇豆の御酒御食海川山野の種々の物を置足はして進
り由志利伊都志利拜奉らくを相宇豆那比給ひて夜の
守日の守に守幸給ひ異しく怪しき禍事無く緩怠る事

無く諸人の心足ひに疾く速けく功畢へしめて報賽の
御祭仕奉らしめ給へと恐み恐みも白す

同 成功式祝詞

此の齋場に忌竹刺立注連繩曳延へ比母呂伎立て齋回
り清回り招奉り令坐奉る掛巻くも畏き天理大神の大
前に何某恐み恐みも白さく先に祈願奉りて工事を起
し夕曉忘るばかり晝はも日の盡夜は夜の盡緩怠らず
彌進に進み彌締に締りて架渡し、此打橋を何々橋と
名附けて今日の生日の足日の朝日の豊榮登に渡始の

式行はむと諸の人等此處に參來集ひて大神の廣く厚く守給ひ惠給ひて堅固く壯大く何怜に美しく造り畢へしめ給ひし高く尊き恩賴を於牟加之美忝みて嚴重に御祭仕奉り御酒御食を始て種々の味物を禮代の幣帛と入取の机に置高成して進り宇豆の玉串を捧持ち進退ひ匍匐ひ拜み仕奉らくを相宇豆那比給ひて平しく安けく聞食て霖雨降り川水溢ることも風吹き地震揺ることも落る事無く崩る事無く彌遠に彌長に彼方此方の諸人が渡らむ隨に守りたまへ幸へ給へと恐み恐みも白す

學校開場式祝詞

此の齋場を假の眞屋と比母呂伎立て招奉り令坐奉る掛卷くも綾に畏き天理大神の大前に姓名慎み敬ひ恐み恐みも白さく白銀に黄金に玉に優りて貴き物は人の智になも有りけり現身の人と生出て苟も智の無くは昆ふ虫の類に等しく國と共に伊蹂躪らへ將石瓦の類に等しく國と共に打碎かへ人なりながら人の權も位も亡せて鳥に獸に劣果苦瀨に落ちて悔歎かむは灼なる許止和理ここそ云ふべけれ日の没る西邊の國の

人々が其が國富ましめ大船の煙立双べ東の大國小國
落る隈無く伊往回り彌益國の富強きをしも圖りけら
くは其智に富みたる故にこそ有らめ故是を以て言卷
も由々志尊し我天皇の畏き大御令下給ひて大御國內
の處々里々落ちず學校を建てしめ給ひ文書學び種々
の業神習々はしめ給ふが故に各彌進に進み彌締に締
り往くなるを此度此の處にも如此嚴重に麗しく廣げ
き伊都の家造らひ何々學校こしも稱へて家調ひ物皆
足らひて今日を生日の足日と内外の塵拂清めて先御
祭仕奉りて宇豆の御酒御食種々の幣帛を捧奉り宇豆

の玉串を捧持ち鶉成す齋伏しつゝ拜仕奉らくを相宇
豆那比給ひ進る幣帛を安幣帛の足幣帛と平けく安け
く聞食給ひて今より始て教へむ人の教の道踏違ふ事
無く學はむ人の學の則を過つ事無く枉津日の枉事に
相率り相口會ふ事無く大御言の隨に我教祖の教給ひ
し正しき道に遵奉りて一日は一日碁止に一月は一月
碁戸に白銀に黄金に玉に優りたる良き智の正しき智
を持しめ給へと鹿自物膝折伏せ鶉自物頸根突貫て恐
み恐みも白す

祈旅行安全祝詞

掛巻くも畏き天理大神の大前を恐み恐みも拜奉り禱
 白さく何某い今日を生日の足日と議定て首途の保伎
 碁止保伎母止保利宇豆の御酒御食種々の物を奉り由
 志利伊都志利仕奉らくを相宇豆那比給ひ獻る幣帛を
 安幣帛の足幣帛と平けく安らけく聞食給ひて東行西
 行由伎加布道の隈々行違ひ踏迷ふ事無く坂の御尾河
 の瀬碁止に湯津磐村の如く塞坐て枉津日が上往かば
 上を守り下往かば下を守り宿らむ驛に波天武泊に其
 處々を知らむ大神等と神議々神防々夜の守り日の守

りに守り幸給ひて喪無く事無く立歸らしめ給へと恐
 み恐みも白す

祈海上安全祝詞

掛巻くも畏き天理大神の大前に恐み恐みも乞祈奉ら
 くと白す八十日日は有れども今日を生日の足日とト
 相定めて此の大船に眞懺志自奴伎舳解放ち艦解放ち
 て何國何港に伊古岐渡らむと船装して宇豆の御酒御
 食種々の味物を置座に置足はして進り齋知り嚴知り
 拜奉り禱奉らくを相宇豆那比給ひ獻る幣帛を安幣帛

の足幣帛と平けく安けく聞食給ひて大海原に荒き波
荒き風立たしめず伊古岐毛止保留島の崎々伊古岐渡
里天武浦の古斗々々怪しき萬我無く異しき事なく返
らむ日は枯野の船の彌早く本津港に伊古岐返らしめ
給へと鹿自物膝折伏せ鶉自物頸根突貫きて恐み恐み
も白す

祈漁獵祝詞

掛卷くも畏き天理大神の大前に恐み恐みも拜奉り禱
白さく姓名等か家業と此の浦回到網子調て奥津波邊

津波凌き棹搦の力の及ばむ加岐利船の艦の到留る伎
波美伊漕回り伊往回らひ海幸獲てむと大神の廣き厚
き恩頼を仰奉りつゝ船出爲らくを相宇豆那比給ひ進
る宇豆の御酒御食種々の物を安幣帛の足幣帛と平け
く安けく聞食給ひて荒き波風の悪事無く鱗の廣物鱗
の狭物と大魚小魚の海幸を請の隨に獲しめ給へと恐
み恐みも白す

諸祈願報賽祝詞

掛卷くも畏き天理大神の大前に恐み恐みも白す先に

大神等の恩頼を乞祈奉りつゝありけるに大神等殿の御靈を幸給ひて此度恙無く事成終へつれば其を嬉み辱み重み尊み奉りて大綾威に報い奉らむと今日なも報賽の禮代の幣帛と宇豆の御酒御食種々の物を置座に置足はして進り鶉成す齋ひ回ほり拜奉らくを相字豆那比給ひ獻る幣帛を安幣帛の足幣帛と平けく安けく聞食給へと恐み恐みも白す

成年式祝詞

掛卷くも畏き天理大神の大前に恐み恐みも白さく何

某はも何年何月何日此の現身の人と生出て、年普く日遍く皇神等の廣く厚き恩頼を蒙り稚く弱く劣き身の喪無く事無く壯に健き人と成たりて今日の生日の足日は新玉の年の二十年を重ね大君の醜の御楯と成ぬへき齡來ぬるに依りて其保岐古止申奉らくを相諾ひ給ひて獻る御酒御食種々の幣帛を安幣帛の足幣帛と平けく安けく聞食給ひて今より後も彌遠に彌永に守幸へ給ひ世の長人世の遠人と命長く在らしめ給へと恐み恐みも白す

婚姻式祝詞

掛巻くも綾に畏き天理大神の大前に
 恐み恐みも白さ
 く此度何某はも大神の廣き厚き恩頼を被りてなも何
 某が米傳比多志々女を娶り今日を生日の足日の吉日
 と卜相定めて皇神等に禱申して夫婦の結の式を執行
 はむと大前に松竹梅を植樹老翁老嫗及鶴龜の形なと
 作備へ宇豆の御酒御食種々の物を供奉り入紐の同心
 に睦親み拜仕奉る状を相宇豆那比給ひ獻る幣帛を安
 幣帛の足幣帛と平けく安けく聞食給ひて夫婦の中は
 松の縁の登古止波に竹の節の操正しく梅の花の雪の

中にも香しきが如く老人の老も若夜伎て鶴龜の千年
 萬代息長く在らしめ給ひ夜の守日の守に守幸給へと
 恐み恐みも白す

誕生式祝詞

掛巻くも畏き天理大神の大前に慎敬ひて白さく何某
 の眞名子はも今日の生日の足日に皇神等の神慮の隨
 に宇都會美の世に生出て、奇しく尊き恩頼をしも仰
 奉りて人と成りなむ初日の言壽の志留之と宇豆の御
 酒御食赤飯に種々の物を取添へて進り齋万波利清万

波利拜仕奉る状を相宇豆那比給ひて獻る幣帛を安幣帛の足幣帛と平けく安けく聞食給ひて夜の守り日の守に守恵まひ幸給へと恐み恐みも白す

命名式祝詞

掛巻くも畏き天理大神の大前を慎敬ひ恐み恐みも白く大神の御幸によりて生出てし何某が眞名子を何某と命名つれば夫を告奉らくを所聞食諾坐して彌々益々撫給ひ慈給ひて麻賀言麻賀事に遇はしめ給はず幸く眞幸く末遠永に仕奉らしめ給へと御酒御食種々

の物を獻りて稱言竟奉らくを平けく安けく聞食せと白す

初詣祝詞

掛巻くも畏き天理大神の宇豆の大前に恐み恐みも白く何某の眞名子某い今年何月何日大神の大御心と爲て生出たる事の由を於牟賀志美辱み奉りて今日を生日の足日と大前に參來て拜奉らしめ禮奉らくを相宇豆那比給ひて今より始めて彌遠に彌永に天皇の大御多賀良と愛給ひ慈給ひ禍事に相率る事無く夜の守

日の守に守り恵まひ守幸ひ給ひて天皇の醜の御楯と成らしめ御國の爲伊美自伎功を立てしめ給へと恐み恐みも祈願奉らくと白す

葬儀靈祭之部

遷靈詞

阿波禮惜しくも身退り坐ぬるかも阿波禮悲しくも死去坐ぬるかも今日は、や親族等の請求の隨に葬儀仕奉らくと汝靈魂を此の家内に奉齋り奉鎮らまく欲れば汝命の分魂此の靈璽に遷出で大座まして留居坐せば

と御枕邊に蹲居て恐み恐みも白す

鎮靈詞

此の小床を拂ひ清めて坐奉り齋奉る何某君の靈前に白さく今君の靈を此家の靈屋に永遠に鎮奉り齋奉らくと進る種々の物を清き明き心計の禮代と受け諾ひ給ひて此家の守護神と坐して家人を恵み子孫を幸へ給へと乞祈奉らくと白す

發葬詞

何某君の前に姓名謹みて白さく君はも性質正直忠實
に坐して身を修め家を齋へ給ふは言ふも更なり國の
爲に身を委ね道の爲に心を盡し給ひたれば親族朋友
を始め總へて相識れる人等盡く百年も千歳もかなこ
思頼みて在經ぬるを去し何年何月の中旬より心地例
ならずして病臥しつゝ伊坐しけるに今年今月の何日
齡何十何歳を此の世の限として逝水の還らぬが如く
落月の見ふざるが如く隠逝きましゝは惜しきも惜
しく悲しきも悲しき事になも然れば殯室の任に長く
久しく奉仕らまくと思へとも現世の制掟として然在

るべくも在得れば甚惜しき遺骸を棺に斂め輿に昇載
せ發葬式仕奉らくと御酒御食又種々の物を本式の禮
代と進らくを平けく安けく所聞食せと白す如此所聞
食ては前供に立ちて導奉り後供に隨奉り伴行奉らく
を以て千歳の住所と定奉れる墓所に出向せ給へと謹
みて白す

誄詞

あはれ何某の君はや君はしも年號月日何誰の愛子と
生出て、本教の儀式の任に命名式を乞ひ神の御教の

隨に名を何某と唱へ年齢何歳にして小學教の業を卒へ中學校に入り五年の間に全科の學業を卒へ斯くて家業を繼ぎ某氏の女何子を妻とし男何人女何人を擧坐しき性質素より慈愛深く徳義厚く忠誠孝順なりしかば世間の聞も可く人皆に信用ぬられし故に公共事業にも心を盡されし事なむ多かりける斯くて何年月長男某君に家督を譲らせ身安く心樂しく老を養ひつゝ在けるか現身は爲便なきものごとて去し何年月頃より心氣例ならず不快み坐ぬれば親族打集來て月頃相親める醫師に請ひ年來信賴仕奉れる我大神に乞

ひ烏羽玉の夜は夜須我良に赤根指す晝は志美良に看護らひて其の身元の如く全く壯健に坐さしめむと請祈つつありけるに天壽の限にや坐けむ今年今月何日年齢何十何歳を此の世の限として朝露の消ゆるが如く逝水の返らぬが如く八十限路に隱り坐しゝこそ悲しことも悲しく惜しことも惜しき極なれ故搔暮るゝ涙に何事も見も別かず聞きも別かね親族の歎の中に顯世の例もあれば最惜しき遺骸を捧奉りて殯室に還奉り何日の間靈を慰奉り前世を偲び後世を慕ひて仕奉りつゝありけるが儲しも在るべきにあられば葬儀執行

はむと遺骸をば棺に歛め輿に昇き載せ奉り來て埋葬
らむとする状を平けく安けく聞食して後も輕く行先
も穩に幽界に伊行到給ひ正しき神の列に入座して此
の家の守護神と成らしめ給へと悲み慄み恐み恐みも
白す

埋葬詞

阿波禮何某君の前に白さく最も惜しき御棺をしも藏
め奉らむとして親族等の前に列並み後に立並み安く
穩に持擔ひ來て懇切に埋葬式仕奉らむとする状を平

けく安けく聞食せと白す空蟬の世は果敢なき例には
あれど昨日に變る今日の態を見奉るにつけては如何
に悲しとも悲しからざらめや君が現世に在し、時は
世の事家の業に勤勞き親族を慈み人の交さへ疎から
ざれば相交れる人相語らへる人はしもいかで世の永
人世の遠人と思頼みつゝありけるを朝露の消ゆるが
如く逝水の返らぬが如く身まかり給へるは世の習こ
は謂ひながら言はむ術爲む術をだに知らざりけり去
れど此くてしも在るべきにあらねば常磐の松の厚き
板以て柩を作り甚惜しき御亡骸を搔擧げて清潔き白

砂の衣取著せ和けき襦袢取敷きて其の上うへに坐させ白
妙の枕まくらを巻かせ年頃愛給ひし種々の物を取添へて厚
衾指覆ひ歛め奉りて出立たせる行路の儀装は榮ゆる
物ものと五百枝真榊まきに白幣青幣を取垂て、最先さいぜんに持捧げ
打靡く物ものと白旗赤旗を立列たてりね送奉り來て斯く仕奉ら
くを聞食諾ひ給ひて汝靈みたまが此の世に伊麻曾加利志時
御靈蒙れる我が天理大神の稜威を思頼みて百不足八
十の隈手は遙けくも惑ふことなく猶豫ふことなく唯
一筋ひとすぢに思定めて後うしろも軽く行先も安く冥界みやうがいに伊行き到
り坐し正しき神の列つらに入坐して世を幸へ家を守る有

功の神かみと成らしめ給ひて先に招奉りて靈屋たまやに坐奉り
鎮奉れる汝が分魂わかたまの神かみと共に守幸へ給ひて現世いまよに在
す親族兄弟おやからをば幸く眞幸く遠永とほながに毎年の御祭仕奉ら
しめ給へと終の御饗あへと御酒御食種々の物を供奉らく
を平けく安けく聞食せと申す

火葬詞

あはれ何某の君の前まへに白まさく前に奉告りしが如く此
くて在るべきにあらねば葬儀奉仕らまく欲するを公
の御掟おきてもあり道程みちさへ遠ければ最惜しき遺骸あたまをば迦

具土神の御稜威の任に遺骨として親族等諸愼み畏み
取手静に收奉り柩に令坐奉りて深く厚く奉葬り埋奉
らむと仕奉る状を平けく安けく所聞食せと白す

葬後靈祭詞

此家の守護神と齋奉りし何某君の靈の前に白さく前
に告奉りし事の如く埋葬式も今しも恙無く畢にたれ
ば葬後靈祭仕奉らくを平けく安けく所聞食して禮代
と供奉る種々の物を御心の安幣帛御思の足幣帛と受
け諾ひ給ひて遠御祖親族の靈等と御心を合せ遠永に

鎮伊坐し家門廣く子孫安く榮令め給へと乞祈奉らく
と白す

十日祭詞

此の小床を拂清めて坐奉り齋奉る何某君の靈の前に
白さく阿波禮葬儀仕奉りしは昨日の如き心地すれど
も過行く日時は暫しも止らずて今日はも十日と云ふ
日に成りぬ故親族等を始め人皆伊寄集ひて其式營奉
らくと捧奉る種々の物を御心も静けく御思も安けく
所聞食して汝が靈の現身なりし時妻子を慈み奴婢を

恵み家を齊へ財を理め給ひしがごこく現在の親族を
守幸へ時々々の靈祭も厚禮に嚴肅に今日の祭に肖令め
給へご拜敬ひて白す

五十日祭詞

百日祭詞倣之

此の靈屋に齋奉り坐奉る何某君の靈前に白さく君は
も此の世を去り給ひしより逝水の行きて返らず指折
數ふれば今日しも五十日(百日)ごぞなりにける故親族
を始め諸寄集ひて御祭仕奉り嚴の御靈を慰奉らむご
在りし世に愛で給ひし種々の物を始め時の菓山野の

物供奉らくを平けく安けく聞食して此の家内は更な
り親族に至る迄禍日と云ふ神の禍事に相口會ふ事な
く相率る事なく病しき事なく煩しき事なく家の業を
彌進めに進め家の基を彌固めに固め子孫の八十續彌
遠永に令在給へご恐み恐みも白す

壹年祭詞

阿波禮何某の君の靈前に白さく君はも去年の今月今
日此の世を去りて幽界に出立たせ給ひ親族が世の永
人世の遠人ご思頼みし望も現世の習とて得叶はず空

しく歎かひ悲む中にも月日は環の如と循環り周りて春
の花秋の紅葉に在りし世を偲びつゝ早くも一年とぞ
成りにける君と相語らひし人々は今斯く在れども君
が係は見えず君が慈み給ひし子女は此の席に侍れど
も君が姿は在らずあはれ悲しきかもあはれ悔しきか
も然はあれと出立たしゝ靈魂の幽界より返坐さむ術
もなく歎きても甲斐なき事にしあれば御祭仕奉りて
靈魂を慰奉らむと親族打集ひて種々の物供奉り白し
奉る事の由を平けく安けく所聞食して夜の守日の守
に守幸へ給ひ子孫の彌續き伊賀志八桑枝の如く立榮

はしめ給へと謹敬ひて白す

五年祭詞 十年祭詞倣之

此の靈舎に坐奉り齋奉る何某の君の靈前に白さく今
日五年(十年)の靈祭仕奉らむと親族又故舊相集ひて御
酒御食種々の物を供奉らくを甘らに所聞食諾ひ給ひ
て此の家内には諸の禍事なく諸の災害なく幸く眞幸
く彌榮に榮ゆる門と在らしめ給ひ又子孫諸は八十
續伊賀志八桑枝の如くあらしめ給へと何某慎敬ひて
白す

改祭詞

我が皇御國は天地の分れし時ゆ神隨の道行れ來て直
く正しかりしを空蟬の世の降行まにまに神代にてふ
りさへ漸々に衰へ祭の式葬の事共外國風に率られた
るが多かるを明けく治れる御代には萬の事古に立返
り尊き神道愈明なるにつけて本教の御稜威も眞澄鏡
まさやかに御功德を祈請奉る人々多なる中に此の何
某はも豫てより我が大神の大御蔭を慕奉り我が大教
の旨意を信奉りて此度我が正しき道直き教に入立ち

祭の式をも改めむとするを大神の大御心にも憐れ所
思食して今より後は何某が身に災なく何某か家に禍
なく彌遠に彌永に幸多かる教徒とあらしめ給へと御
酒御食神水片鹽種々の物を供奉りて此の大神の大前
に慎敬ひ恐み恐みも白す

遠祖祭詞

此の靈屋に坐ます遠祖世々の御祖の靈前に慎敬ひて
白さく今日御祭仕奉らむと海川山野種々の物を供奉
らくを平けく安けく所聞食して此の家内には禍日こ

いふ神の禍事なく和都良比廼大人と云ふ神のわづら
ひなく諸の罪穢は萌さぬ前に拂退け給ひて家業は日
に異に榮に年々に盛ならしめ子孫は八十續き彌遠に
彌永に御祭美しく仕奉らしめ給へと何某親族諸に代
りて畏み畏みも白す

信徒合祀祭詞

此の神床に嚴の神籬立て、信徒諸の靈を招奉り坐奉
りて何某慎敬ひて白さく阿波禮汝神靈等よ最も貴き
我が大神の恩頼に依りて現世に伊麻曾加里志時は各

幸多かる身と坐まし又隱世に伊行きては大神の導に
よりて正しき神の御許に到り坐ぬるは汝神靈等の現
世に坐し、時より深く大神の御稜威を仰奉り本教の
正しき道に従ひ坐せる故になもありける斯れば今汝
神靈を我が尊き大神の御許に仕奉らまく大神等の御
後に齋奉らむと今日臨時の御祭仕奉り御酒は甕の腹
満並べ御食は高杯の彌高成して供奉り大海原に住む
物大野原に生ふる物種々を置足はして白奉る事の由
を平けく安けく相諾ひ給ひ相嘗に甘らに所聞食して
汝信徒の家にも身にも諸の災なく諸の禍事なく夜の

守日の守に守幸へ給ひ又本教を彌廣に彌遠に布弘らしめ給へと乞祈奉らくと白す

信徒合靈祭詞

此の神床を拂清めて靈代と神籬立て信徒諸の神靈を招奉り坐奉りて何某慎敬ひて白さく今日を八十日の善き日と定めて汝神靈等の御祭仕奉らむと禮代と奉る物は御酒御食神水片鹽大野原に生ふる物と甘菜辛菜大海原に住む物と鱈の廣物鱈の狭物奥津藻葉邊津藻葉に至るまで横山の如く供奉り御祭仕奉らくを平

けく安けく聞食諾ひ給ひ各の家内には諸の災なく諸の禍事なく安く穩に守給ひ又此の御教の道をば彌廣らに彌遠らに弘めしめ給へと慎敬ひて白す

天理教祝詞集 終

明治卅四年十二月四日印刷
明治卅四年十二月七日發行

定價金參拾錢

大阪府中河内郡南高安村大字教興寺一番屋敷

編纂者 松村吉太郎

奈良縣山邊郡丹波市町大字三島八十番屋敷

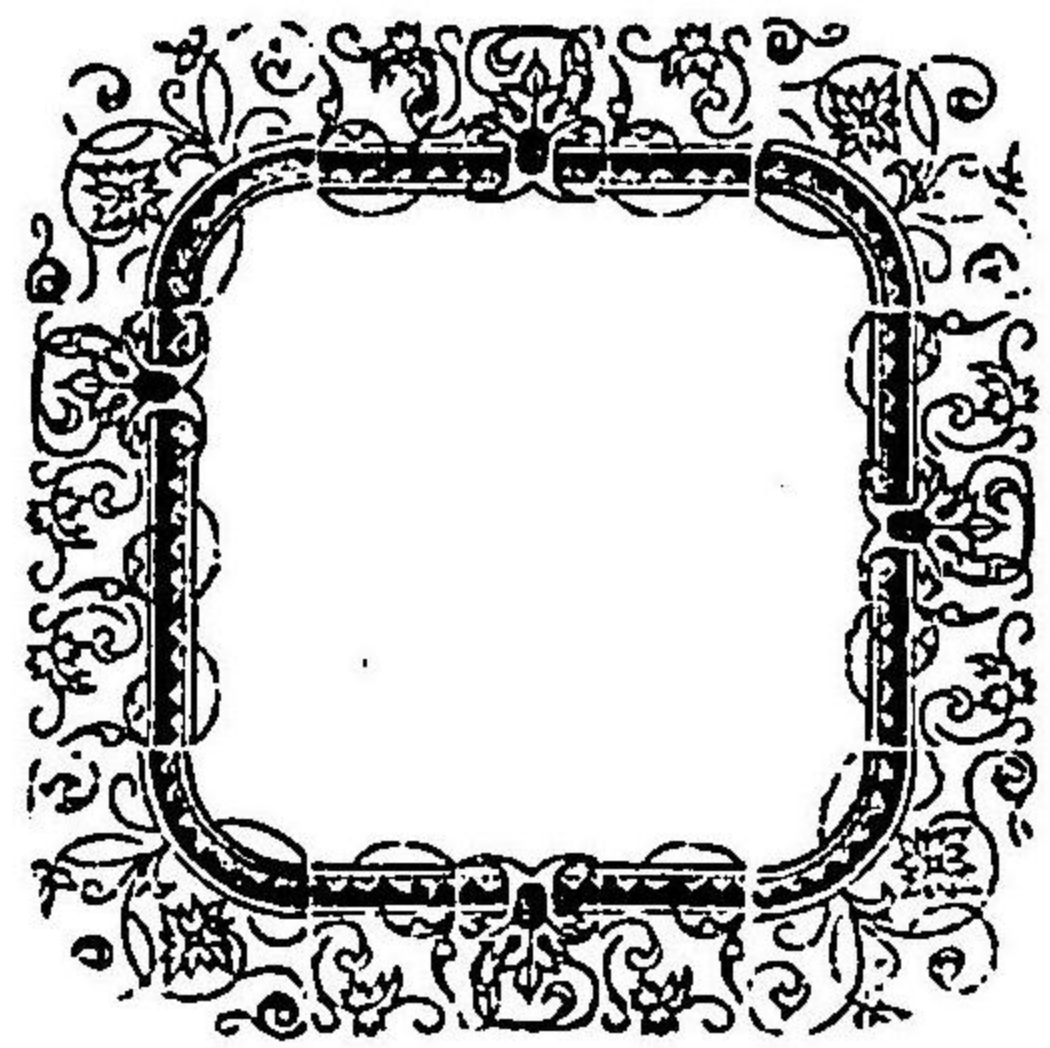
編纂者 增野正兵衛

大阪市東區北久寶寺町一丁目五十八番屋敷

印刷者 濱田正夫

大阪市東區北久寶寺町一丁目五十八番屋敷

印刷所 濱田日報社



219
229

